慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	購買力平価説序説
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.5 (1937. 5) ,p.697(41)- 729(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19370501-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370501-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金 原 之

インフレーション説

購買力平價說

カッセル説の要點

カッセル説とリカアドオ説

爲替理論上に於ける購買力平價說の地位

ロバートソン及びグレゴリイ説

インフレーション說

して何等かの關係に立つべきことは想定される所であつて、 物價と為替相場とが、貨幣の價値即ち購買力の有する對內的並に對外的の二面である以上、為替相場が物價に對 此等兩者の間の關係は、既に長い間論議の對象となつ

聯買力平價說序說

て來たものである。

四 (六九七)

共通の原因に基いて變動すると爲すが如きものである。而して此等三部類の說がそれぞれ幾多の分流を産み出して ゐることは、言ふまでもない所である。 上兩說の中間を行く折衷說であつて、物價及び爲替は兩者各々原因となり得るものと認めるか、或は兩者とも他の ンフレーション説(Inflation theory)であつて、因果關係を物價から為替への方向に求めてゐる。 ば、商品側の事情から解明しようとするものである。これに對立する第二の說は、貨幣側に重點を置くところのイ 物價を其の結果と觀るか、二者孰れかの取扱方を示してゐる。言はゞ國際貸借說は、貨幣價値としての爲替相場を つて、この説では、為替をば獨立の現象と認めて其の物價との關係を至く不問に附するか、若しくは、為替を原因、 而してこの問題に對する爲替學說の態度を觀ると、凡そ之を三部類に分つことが出來る。 第一は國際貸借説であ 第三の説は、

於いても紙幣に對する評價を低下せしめざるを得ない、と觀るのである。斯る觀方に從へば、紙幣本位の爲替相場 の囘復を齎らすには、貨幣數量を縮少して貨幣價値の上昇を圖るの外途がない譯であるが、斯る國に於いて貨幣數 國內物價の騰貴を生するのが常であり、物價の騰貴は貨幣價值の低下を意味してゐるのであるから、從つて外國に するからである。換言すれば、紙幣本位制度には殆んど常に貨幣數量の増大が隨伴するが、貨幣數量が増大すれば 著に現はれるのは、 **替相場の決定乃至變動をは、貨幣敷量及びそれに伴ふ物價の變動に求めんとするものであるから、** 茲に取扱はうとするのはインフレーション説であるが、その要點を述べると、此の説は、その名稱の示す通り、 紙幣本位制度の場合である。即ち紙幣本位國の爲替相場が低落するのは、その對內價値が低下 此の説が最も顯

改善に爲替囘復の唯一の要因を求むるのと對照されるのである。 vation)の如き方策を採らねばならぬこと」なるのである。(註一) 量の大規模の縮少を行ふといふことは殆んど不可能な場合が多いのであるから、結局平價切下(Devaluation; Deval この點に於いては、國際貸借說が、 國際收支の

(能 し Karl Diehl, Theoretische Nationalökonomie, III. Band, Lehre von der Zirkulation, S. 341-3

的に取引される財貨のみの價格を其の基礎として居り、 ことをは、 否定はしないけれども、而も猶ほ大戰後ヨー 此の説の論者は、國際收支がインフレーションとは別に、 のである。それにも拘らず此の説が、インフレーション説に加へられるのを妥當とする所以は他でもない。即ち、 るのである。是れに對して、爲替平衡說はピグーが其の論文に於いて命名したものであつて(註三)、 power parity; Theorie der Kaufkraftsparität) 少禹の る。購買力平價說は後述の如く、 エリスに従ふと、インフレ 一般に强調してゐるからである。 ーション説には二つの類型がある。(註二)一は購買力平價說(Theory of purchasing 一般物價指數を基礎とし、且つ物價から爲替相場に及ぼす因果關係だけを容認す ッパ大陸諸國の經驗に徴すれば、貨幣側要因の方がより强力である 他は為替平衡説(Theory of exchange equilibrium)であ 因果關係は物價と爲替との兩者孰れの方向にも認めてゐる 爲替相場の低下及び國內物價の騰貴を招來し得ることを との 説は 國際

- 金田 Haward S. Ellis, German Monetary Theory, 1905-1933, 1934, pp. 203-204.
- A. C. Pigou, Essays in Applied Economics, 1923, pp. 156-173.

展示したのであるから、此の説が世人の注目の的となり、論議の中心題目となつたことは蓋し當然の次第である。 た。斯る際に、インフレーション說が購買力平價說の姿態を採つて再現し、 を遮斷し、極度の混亂に陷つた結果、世界の爲替相場は其安定點を失ひ、就中交戰諸國のそれは慘落の淵に沈淪し 為替平衡說は寧ろその派出的修正說と考へるのである。殊に、世界大戰と共に諸國の貨幣制度は一様に金との連鎖 併しながら吾々は、購買力平價說こそはインフレーション説の中樞であり、又そのより精練された理論であつて、 紛々たる諸説の中に最も精細な理論を

第二購買力平價說

ー・カッセル説の要點

って彼の所說を窺ふこと」する。 び外國爲替』(一九二二年)なる綜括的著作の出現を見るに至つた。(註一)故に茲では主として此の代表的著作に據 であつた。然るに其の後著はした敷次の論作を經て、漸次その理論的體系を整頓し、結局『一九一四年後の貨幣及であつた。然るに其の後著はした敷次の論作を經て、漸次その理論的體系を整頓し、結局『一九一四年後の貨幣及 めて公にしたのは一九一六年のことであつたが、當時の事態は「世界の視聽をば相場と物價との關聯に集注せしめ た顯著な特殊の場合」だつたのであるから、彼の所論も初めは主として當面の問題に對する政策的考究に基くもの セルである。寔にこの説はカッセルと共に興り、その名と共に喧傳されてゐると言つてよい。彼が此の種の說を初 購買力平價說の代表者として、今日一般に異論なく認められる主張者は、ストックホルム大學教授グスタフ・カット

〈鮭一) カッセルが英語を以て競表した最初の論文は"The Present Position of Foreign Exchanges", Economic Journal

March 1916. であつて、其の後數回同誌に寄稿してゐる。更に World's Monetary Problem, 1922. 一九二〇年プラッセル 1923. 等の系統的逃作が公にされ、その見解は漸次理論的精緻を加へるに至つた。 財政會議に提出したメモランダム)Money and Foreign Exchange after 1914, 1922; Theoletische Sozialökonomie, 3. Aufl.,

の根本思想の述べ方も變化してゐるのであつて、例へば最初の論文に於いては、「互ひに獨立した紙幣を有する甲乙二國あ Exchanges", Economic Journal, Dec. 1918. に於いてゃあつた。(Money and Foreign Exchange after 1914, p. 182) 又そ 比例する。故に甲乙二國間の均衡爲替相場は、 る場合に、甲國貨幣の乙國に於ける價格は、甲國に於ける一般物價の高さに反比例するし、又乙國に於ける物價の高さに 價」とは謂はなかつたのであるが、この語を初めに用ひたのは一九一八年の論文 "Abnormal Deviation in International ある。(Howard S. Ellis, German Monetary Theory, pp. 207 ff. 参照) とされてゐる。即ち彼の說も、絕對的購買力平價說(absolute)から、比較的購買力平價說 (comparative) へ進展したので の商として直接算出されず、關係二國のインフレーションの程度の間に於ける商をば舊爲替相場に乘じたるものに等し ふやりに述べてゐる。然るに一九二〇年のブラッセル財政會議に提出したメモランダム以後に於いては、平價は物價水準 カッセルは、初めの頃(一九一六、一七年)には『理論的爲替相場』(Theoretical exchange rate)と言つて『購買力平 **兩國に於ける一般物價の高さの間の商によつて決定されるであらう」と云**

正八年二月號、同博士著『經濟學新講』第三卷、三五〇頁)次いで山崎覺次即博士は論文『購買力平價說呉經濟學論集、 大正一一年一〇月號『若干の貨幣問題』に集録さる)に於いて、精細な紹介と周到な折衷的批判を述べられた。 カッセルが既揚の最初の論文を競表した當時、其の說は高田保馬博士によつて我が國に紹介批評された。〈經濟論叢、大

力 セルに從ふと、爲替相場は如何にして決定されるかと言ふ問題に對して、單に貨幣に對する需要供給を指摘

(粒 1) G. Cassel, Money and Foreign Exchang, pp. 178-180.

(描门) G. Cassel, op. cit., p. 138.

つ最も本源的な根據であるが、 がそれぞれ其の國に於いて有する購買力の比率に據るものである。これは、二國間の為替相場を決定する第一の且 現實に提供して居るのである。それ故に、自國通貨を以て表示する外國通貨の評價は、主として、此等通貨の兩者 なければならぬ。一方吾々が自國貨幣の若干量を提供する場合には、自國に於ける財貨及び勞務に對する購買力を はんとするは、結局、 茲に彼の所説の出發體が在るのであるが、站らくそれに從ふと、「吾々が外國貨幣に對して敢て一定の價格を支拂 此の貨幣が當該外國に於いて財貨及び勞務に對して購買力を有するといふ、事實に歸せられ 唯それ丈では未だ十分でない。 蓋し外國通貨を所有すると云ふことは、其の所有者

上の差異は標準的為替相場をして、 困難は外國通貨の評價に影響を與へざるを得ないからである。例へば、二國の經濟狀態の差異、殊に運輸及び關稅 と云ふことを意味しては居らぬ。而して斯る處分權能を獲得するが爲には幾多の困難が生ずるであらうが、此等の が外國に於いて其の通貨を以て購ひ得らるゝ財貨及び勞務に對する直接の處分權能を自國內に於いて有してゐる、 兩國通貨の對內的購買力の比率から或る程度まで離間せしむるであらう。

減少すれば、A國通貨のB國に於ける價値は必然同一の割合を以て下落するであらう。又若し同時にB國通貨が膨 れた相場は、兩國通貨の間の新たな平價、 兩國膨脹率間の商を乘じたものと等しくなるであらうと云ふことである。勿論此の新たな標準相場から離れること 例的割合を以て騰貴するであらう。 脹を起して共の購買力の減少を來たしたとするならば、其の結果として、A國通貨のB國に於ける價値は明かに比 であらうが、此の相場は、 貿易上に何等の障碍の起らぬ限り、 の割合に達したとするならば、新為替相場は(A國通貨のB國に於ける相場を採つてみれば)舊相場の四分の三で 其處で次の如き原則が樹て得られる、 AB二國間に典型的な自由貿易が行はれるものとすれば、其の間に何等かの爲替相場が成立する 又其の開きが過渡期には可なり大であると考へらる」。けれども上記の方法を以て算出さ 些少の動搖を除外して觀れば、兩國通貨の購買力の何れかに變動の生じない限り、 例へばA國の膨脹が一〇〇に對する三二〇、 不變の儘存するであらう。今若しA國通貨の膨脹が起り、從つて其の購買力が 即ち爲替相場が全く一時的の動搖にも拘らず常に歸着せんとする均衡點 即ち二國の通貨が膨脹した場合には、 B國のそれが一〇〇に對する二四 標準的爲替相場は、舊相場に 且つ

と看做されなければならぬ。此の平價を購買力平價と名付ける。

場として吾人の熟知したものとは全く異ることを十分知悉し置くことは、理論上にも實際上にも甚だ重要なること 從つて購買力平價も大なる變動を受けたのである。然るに紙幣通貨制度の場合の標準的為替相場はこの購買力平價 である。 によつて決定されるのであるから、今日(戦後紙幣本位の當時)標準的爲替相場と看做さるゝものが、嘗て標準相 「大戦中各國通貨の購買力は、支拂資料の供給過增の爲に、其の程度にこそ相違はあれ、 著しく減少を示した。

るならば、此の事情は恐らくそれ自身兩國貿易の均衡に影響したであらうし、又爲替の標準點に何等かの動搖を與へ 幣價値下落の割合丈移動しなければならなかつた筈である。是れに反して、若し二國の物價が相對的に移動したとす 該兩國間の貿易の均衡に變化なしと觀るを妨げない。其處で此の場合には、爲替の標準點は、 場から出發してそれ以來兩國貨幣價值の下落した程度を考慮すれば、現在標準相場と認められなければならぬ相場 も何れの國の物價も其の相對的關係に於いては不變であるが、たゞ一樣に騰貴を示したに過ぎないとするならば、 に到達するのである。唯正確を期するには、他の事情に全く變化がなかつたことを前提としなければならぬ。若し 選ばれるものは、國際貿易が或る均衡を支持した當時の爲替相場、 ゐるか下落してゐるかを知らなければならぬ。換言すれば貨幣購買力測定の標準を必要とするが、 「鬼に角右の如き購買力平價を算出するが爲には、現在に於ける貨幣購買力が變動したか何うか、 從つて其當時標準となつた相場である。斯る相 上説の如く二國の貨 この標準として 或は増大して

基いて算出するを以て至當とする。此の平價は何れの場合にも大體に於いて新たな爲替標準點を示して居るもので 第一にこの動揺文を考慮に容れるを以て至當とする。 度を非常に異にしたからして、それが為に醸成された為替の動搖は最も重視されなければならぬ。それ故に、先づ らの開きを考慮に容れると云ふことは、 あるが、先づ初めに斯る標準點を決定し、 然るに世界大戦の勃發以來惹起した貨幣價値の低落は異常なものであると同時に、 明かに正當であると同時に、叉斯くせざるを得ないのである(註三)。 而して後に、貨幣價値低落以外の要因から起ることあるべき、標準點か 即ち、 新たな購買力平價を專ら各國貨幣價値の相對的低下に 國に依りて其の程

(福川) G. Cassel, Money and Foreign Exchange, pp. 138-142

物價が因であり、 前と同一額の貨幣を以てするも遙かに少量を買ひ得るに過ぎぬからである。要するに爲替相場は其の國の貨幣購買 物質が騰貴すれば、 決して國際收支狀態に基因するものではなく、 力を反映し、相手國の貨幣購買力との對比、 いて需要されるのは、 其根本原因となすものである。 以上はカッセル説の要點と考へらるゝ所である。 爲替相場は果であると言ふのである。 其の國貨幣の外國に於ける評價に直ちに影響を與へる。何となれば、其の國の貨幣が外國に於 結局其の需要者が其の國の財貨及び勞務を購はんがためであるが、物價が騰貴すればそれ以 然るに貨幣購買力の減少は、貨幣數量の膨脹を意味し、物價騰貴に現はるゝ。故に 即ち購買力平價によつて決定せられる。換言すれば、貨幣購買力即ち 其の國の貨幣購買力が他の國のそれに比して減少すると云ふことを 即ちカッセルの見解に依れば、紙幣本位國の爲替相場の下落は

購買力平價說序說

コ カッセル脱とリカアドオ説

セルの創唱に係るものではない。旣に十九世紀の當初地金論爭の時代以來、紙幣濫發の直接原因となる所の兌換用 關係に於いて考察さるべきは當然であつて、隨つて購買力平價說の根本觀念は決して新しいものでなく、勿論カッ を成してゐると稱せられる。(註一) つたのである。就中正統派經濟學者として、又貨幣金融論策家として著名なりリカアドォは、購買力平價說の先驅 金屬の輸出禁止或は不換紙幣の增發が、爲替相場を自國に不利ならしむるとの見解は、幾多の學者の主張した所だ 以上の如く購買力平價説が其の出發點となしてゐる所は、爲替相場は物價によつて決定せられると言ふ命題であ 前に述べた如く、爲替相場が貨幣の對外價値である以上、前者が後者の對內價値の表現たる物價と、 何等かの

(註一) 勿論購買平價說の思想も、リカアドオ以前に遡り得るのであつて、エンチェルに依れば、ソオントン Thornton であつた。而してリカアドォはそれに對して、部分的公式を與へたのである。Clames W. Angell, Theory of International 同様の言及を爲したが、購買力平價の思想を初めて述べたのは、リカアドオでもミルでもなく、 十九世紀の初頭に、不換紙幣の增大に伴ふ物價騰貴の狀態に關する優れた分析を爲して之を暗示し、ホオナー

カアドオは其の最初に公にした單行本『地金の高價格』に於いて、次の如く述べてゐる。

「世界の貨物を流通させるために用ひられる貴金屬は、銀行の創設されるより前に、 地球上の文明諸國民の間

割合で分配されてゐた。斯くの如く分配されてゐる限り、貴金屬は到る處に於いて同じ價値を有し、 惑は存在しなかつた。 何れも現在使用してゐる數量に對して、同じ程度の必要を感じてゐるのであるから、 それぞれの商業及び富の狀態に應じ、又從つて各國の行はねばならなかつた支拂の數と頻繁さとに應じて、 貴金屬の輸出入を促すべき誘 而も各國は、

國の支拂は、增加するであらう。而して世界の金通貨は、 部分を必要とすることゝなり、而してそれを獲得することゝなるであらう。その國の商業、その國の貨物及びその 「若し富の進步に於いて、或る一國が他國よりも一層速かに發達したならば、その國は、世界の貨幣のより大なる 新しい割合に應じて、分配されるであらう。

現はれるまで輸出されて、諸國間に分配されるであらう。 て保有してゐたと同じ量の流通媒介物を維持し得なくなるであらう。 「同じやうに、若し或る一國が富の一部を浪費するか、又はその取引の一部を失ふときは、その國は、 而してその一部分は、 結局通常の割合が再び 自らが嘗

物となるであらう。即ち金及び銀は廉い國を去つて、高い國に行くであらう。而して若しその鑛山が生産的であつ して金及び銀は、鑄貨たると地金たるとを間はず、 る貴金屬の量が増加する結果として下落し、從つて諸外國のそれと同じ價値を持ち得ないことゝなるであらう。而 「今此等諸國の中の或る一國に於いて金鑛が發見されたとすれば、その國の通貨の價値は、流通內に持ち出され その限度に於いて、金銀の移動は繼續し、 かの總ゆる他の貨物を支配する法則に從つて、 結局に於いて、 鑛山發見前に各國内の資本と貨幣との間に存 直に輸出の目的

在したところの比率が回復せられて、金銀が到る處で再び同じ價値をもつやうになるであらう。只能二つ

David Ricardo, High Price of Bullion, 1810. 小畑茂夫譯『リカアドオ貨幣銀行論集』三三一三五頁

せず、従つて地金の價値は些かも減少しないからである。」(註三) 眞實的ではない。從つてそれは地金の輸出を促し得ないであらう。 貨幣價格を騰貴せしめ、且つ同じ理由から、外國爲替を下落せしめるであらう。 **諸貨物の價格を騰貴せしめるのと全く同じ樣に、而も同じ割合で、地金の** 又別の章句に於いては斯う述べてゐる。「流通が全然紙幣から成立してゐる場合には、 何となれば此の場合には、市場内の地金は増加 - 價値を下落せしめることなしに 併し此の下落は名目的であつて、 紙幣の増加は、 が他

(註三) D. Ricardo, op. cit.『リカアドオ貨幣銀行論集四八頁』

へ向つて流通するのであるが、而もこの流出は、貴金屬が何れの國に於いても同一價値を有するに至るまで繼續す て、一國の貴金屬量が増加すると、その國の通貨の價値は下落する。その結果貴金屬は相對的に高價となつた國 以上引用された二つの章句をみるに、前者は金屬本位の場合を述べてゐるのであつて、 又この場合為替相場は上下の金輸送點間にのみ變動し得るのである。 從つて一定量の貴金屬は總ゆる國に於いて同一量の商品を購ひ得ると言ふ、 即ちリカアドォに在つては、價格の均衡が個々の商品に就いてどはなく、 即ち、何等かの理由 結論に到達するので 一般物價水準につい

後者の章句に於いてリカアド *が對象としてゐるところは、金屬本位ではなく、 紙幣本位の場合である。 此の場

になる。 紙幣國の物價騰貴に相應するのである。 されるのではなく、 流通紙幣が増加すると、その紙幣國と他の金屬本位國との間の價格の均衡は、 言換へると、 外國爲替の低落を通ずるのである。而して外國爲替の低落は、紙幣流通量の增加に相應し、又 一定量の一國通貨は、自國に於いても外國に於いて、 即ち斯く外國爲替が低落すれば、關係諸國の平均物價は、金で測れば同一 同一量の商品を購ひ得ることになるの 流通媒介物の輸出によつて回復

ば、漢堡英國間の為替相場は平價であるが、若しも一三〇磅の對英手形が一〇〇磅の對漢堡手形と同じにしか購買 を舉げると、「爲替相場は、又或る兩國に共通なる標準と比較することに依りても之を確め得るものである。若しも 一〇〇磅の對英為替手形が、 更にリカアドォは、其の『經濟學及び課稅の原理』に於いて、 為替は英吉利に逆なること三割である。 佛蘭西又は西班牙に於いて、 同金額の對漢堡手形と同一數量の貨物を購買し得るなら 同様の思想を押し進めて展示してゐる。その若干

を引出すか、英吉利の通貨を増加せしむるかすることに依つて、 西に對しては二步、西班牙に對しては五步逆であると言はれるのである。それは通貨の水準が、此等の諸國に於い いて一〇五磅を受取る權利を買ひ得るものとする。此の場合英吉利との爲替相場は、和蘭に對しては一步、佛蘭 「英吉利に於いて人が一〇〇磅を以て手形を、 當然あるべきよりも高きにあることを示すものであつて、諮園の通貨と英國通貨との比較價値は、諸國の通貨 即ち和蘭に於いて一〇一磅、佛蘭西に於いて一〇二磅、西班牙に 直ちに平價に復せしめられるであらう。」(註四)

購買力平價說序對

五三(七〇九)

替相場の低下で相殺されるからである。(註五) ならば百分ノ五十であらう。併し英國の製造工業には何等の阻害は與べられぬであらう。監し貨物の價格騰貴が爲 果は、一千萬磅の代りに、新鑄匆々の純良の磅一千百萬を强ひて流通せしむる事であつたならば、爲替相場は英國 に對して逆なること百分ノ九となるであらう。若しも一千二百萬ならば、英國に逆なること百分ノ十六、又二千萬 「若しも貴金屬の輸出禁止といふが如き、爾く不合理の法律を能く勵行することが出來て、而して斯る禁止の結

(註四),小泉信三譯『經濟學及課稅之原理』一三三頁 D. Ricardo, Principles of Political Economy つ に に K. Gonner, pp. 128-129. and Taxation, ed. ьy

.註五) 前掲小泉信三譯、二二四頁 Principles, p. 215.

する所論も見出されるのである。(例へば、『經濟學及び課程の原理』第七章『外國貿易論』中に含まれる見解の如 中心としてゐるに對して、前者は紙幣本位の場合をも廣く取扱つてゐる點に過ぎぬ、 観念である。故に屢々、カッセル説はリカアドォ説を敷衍した丈で、唯兩者間の相違は、後者が金屬本位の場合を るのであるが、而も彼は貨幣減價は物價騰貴の一部の原因と認め、 し)又彼は、購買力平價說をは『物價』といふ言葉で表はさず、『貨幣減價』(depreciation) ら、リカアドォに在つては、未だ其の爲替理論は完成されてゐなかつたのであつて、 以上の章句に現はれる所のリカアドォの見解は、カッセル及び其の流れを汲む人々の購買力平價說に於ける根本 兩者を區別しようとしてゐるのである。(註六) 其の前記根本觀念と相ひ背馳 と論ずる者がある。併しなが と云ふ言葉で述べてゐ

を附與するに至つた貢獻は、 それ故に斯る未完成のリカアド カッセル其の人に對して容認して然るべきであらうと考へられる。 **すの見解に對して、より精緻な理論的統一を與へ、以て爲替理論として獨立の地位**

註六) James W. Angell, op. cit. p. 58.

つて、 國貿易論の章に於いて述べた所を以て、恐らく科學的性質を有する最初の爲替理論であるとなしたが、併しリカア 金(又は銀)の諸貨物に對する購買力を意味したのであると言つてゐる。而して前記『外國貿易論』の章に於ける るとすると、此場合為替相場は平價に存するであらう。併しそれでは、何等為替理論の問題とはなり得ないのであ 來る國に於いては、その物價水準が高からざるを得ないと云ふことは明かに真理である。 から他國へ金屬を輸送する費用 いて需要される爲であらうと、或は其等生産物の輸送が容易なる爲であらうと、鬼に角其の生産物を容易に輸出出 オの關心をもつた主題は、直接為替に在つたのではなく、寧ろ諸國民間に自由商業交通の存する場合に於ける貴 カッセル自身は、リカアドォの為替理論を批判して斯ら謂つてゐる。即ち彼は、リカアドォが『經濟學原理』外 貨物輸送が、其の一方向に於ける方が逆の方向に於けるよりも一層困難となつた場合に、爲替相場が購買力平 從つて分析は、各國に於ける物價水準の地位に集注されるであらう。かくて、一國の生産物が特に他國に於 それに依存する各國に於ける貨幣價値の相違に在ると認め、從つてリカアドォは貨幣の價値を以て、 カッセルの表現方法に從ふと、結局「同一金屬通貨を有する二國の場合である。 (厳格に言ふと、一通貨を他の通貨に換へるに要する全諸掛りを含む) が無視出來 此の結果は一國から他國 假りに、一國

貿易に加へられる障碍がその中の一國からの輸出の場合の方が他の一國からの輸出の場合よりも安いとすれば、こ 物價水準のより高位が輸出上の有利を相殺して、 の場合には、 價から雕反するといふ點に就いて、 前者の國に於ける物價水準が高いにも拘らず、爲替相場はその金屬平價に一致して存するであらら。 (カッセル)の述べた所と一致する。若し、輸送諸掛りのために二國間の 均衡が維持されるのである。

ぬ所である。殊に、リカアドォの到達した推論とい 式で表現されざるを得なかつたのであつて、この事は、リカアドォを研究するに當りて念頭に置かれなければなら 推論は、眞の爲替理論が有さねばならぬ所の多くをば、 て存しなければならぬ。この議論を基礎として、 し貴金屬の貿易が全く自由であり、且つ貨幣が何等の諸掛りもなく輸出し得るとすれば、 「以上がリカアド **ォの所論であるが、彼は更に『賃銀に對する課稅』の章に於いて、之を發展せしめてゐる。若** リカアドォは結局幾多の推論を惹いてゐるのであるが、それ等の 直接の為替研究の結果としての推論とを比較する場合にはさう 實際包容してゐる。併し彼の結論は、勿論各種の違つた形 爲替相場は平價に一致し

(諡句) G. Cassel, Money and Foreign Exchange, pp. 170-172

調してゐる點に觸れてゐる。 金屬本位の場合に保有する筈の金額以上に其の通貨の增大するのと、同一比例を以て平價から離反し得る旨を、 勿論カッセルも、 リカアドォが或る一國の紙幣本位を採用する場合を論じ、この場合その爲替相場は、 併しカッセルの觀る所を以てすれば、リ カアド すの此の考察は主題に附隨するもので、 强

國間の爲替相場を研究するに當つて到達する推論と、形式上可なり劇しい矛盾を示すことは何等怪しむに足り 諸掛りを必要とすれば、爲替相場は平價から離れ得るわけで、從つて或る限界内に於いて、爲替は變動し得るので ること、並に貨幣の價値即ち吾々の謂ふ一般物價水準は、各國の利用し得る貨幣供給量の相違する結果、 と言ふのである。(註八) 共の證據にしてはならぬ。 る貨幣の比較的價値を論ずるに當つては、吾々は決して何れの國に於いても、その貨物で評定せられた貨幣價値を に、リカアドォが次の如き結論を惹いたといふことは全く當然の次第である。 に従つて相違し得ること、を示さうとするに在るのである。而して「若し一國から他國への貨幣の輸送が何等かの (旣揭譯本一三二頁 Principles, p. 128.)と。斯くの如き公式を與へられた推論が、各々獨立紙幣本位を有する二 由つて確めらるゝものではなくて、一國の通貨の價値を他國の通貨で測ることに依つて、確められるものである **併し斯かる變動は獨立の要素であつて、各國に於ける貨幣の購買力には何等の關係がないのである。それ故** 孰れの國も金屬本位と平價の為替を有すれば、其の貿易の恩惠に依り或る一定量の貨幣を受取 為替は決して貨幣の比較的價値を、穀物、羅紗又は其の他何れかの貨物で測定すること 即ち、『爲替相場を論じ、・諸國に於け 國の異る

指八) G. Cassel, op. cit., pp. 172-174.

カッセ **、俳しながら、リカアドォが斯くの如き問題の取扱方をしたのは、當時の歴史的狀態の影響を受けたからであると、** ルは觀るのである。 即ち、リカアドォの當時はナポレオン戦争の時代で、果して英吉利の貨幣が低落したのか

購買力平價說序說

五七 (七一三)

から、 常狀態からの單なる雕反と考へられたのは當然であつた。又十九世紀の初頭に於いては、運賃が頗る高價であつた 對象とするは、全く自然であると言ふのである。 どうかといふことが未解決の問題であつた。だから通貨問題の研究が主として金屬本位に向けられ、紙幣本位は正 しながら世界大戦後の今日に於いては、事態が全く一變してゐるのであるから、自由紙幣本位を以て吾々の研究の 輸送諸掛りの相違に由る各國貨幣購買力の差違が、通貨問題の重要々素となつたのも至極當然であつた。併

三の爲替理論上に於ける購買力平價說の地位

置かう。 長い歴史を有するわけであるが、茲では、世界大戰後殊にカッセル説の川現以後に限るであらう。 次に、 尤も購買力平價說の根本思想は、前述の如く古き時代にまで遡り得るのであるから、之に對する論議も亦 購買力平價說が、為替理論上に如何なる影響を及ぼしたか、又如何なる批判を受けてゐるかを、 概觀して

英吉利の學者が、假令若干の修正を加へたとは言へ、殆んど總べて此の說の承認者たるに至つたことは當然と言へ 精緻ならしむることに力めてゐるケムブリッヂ學派に、此の說の容認者が集つてゐる。 實に英吉利は、 カッセルの論文が發表された英吉利に就いてみる。一體購買力平價說は、それがインフレーション説に屬 其の理論の構成は貨幣數量說の基礎の上に立つてゐる。それ故に、貨幣價値の數量的研究に力を盡した カッセル説が最も多くの信認を集め得た國であるが、就中古典派理論を幾多の點に於いてより

× G. Hawtrey は、二國間の爲替相場は、あらゆる財貨が何等の諸掛りなく自由に諮地方間

貸借で説明されると、爲してゐる。(註二)ピグー 費標準の變動との間に、精確な必然的な且つ即時の關係を想定することは出來ないとし、 叉通貨の購買力が變動すれば、それに相應して爲替相場が變動すると述べてゐる。〈註一〉ケーンズ John Maynard Edwin Cannan 等も大體同様の見解を持してゐる。殊にその最初の二人は甚だ率直な贊成說を披瀝してゐるのであ Keynes は、その『幣制改革論』に於いては、カッセル說を以て、紙幣本位國間の為替相場を闡明するものと認めた。 るが、彼等の所説は後に更めて考察しよう。 カッセル説に對して若干の留保を附してはゐるが、爲替相場は、 併し後の大著『貨幣論』に於いては、購買力平價說を離れ、長期間を採つてみても、二國間の爲替相場の變動と消 に輸送出來るとすれば、それぞれの貨幣計算單位の、商品で測つた相對的購買力即ち相對的價値を表現すると言ひ、 て調整されると觀てゐる。(註三)其の他、 やストラコッシュ Sir Henry Strakosch の如き實際家側に、 ロバートソン D. H. Robertson グレゴリイ 唯此の國に於いて、特異の樣相を示してゐるのは、スパルディング A C. Pigou も亦購買力平價說の代表者の一人であつて、 その均衡狀態が破壞されると、 批判的見解が見出されることである。 T. E. Gregory キャナン 短期間の爲春變動は國際 購買力平價に從つ 彼は X.

- 温门) R. G. Hawtrey, Currency and Credit, 2nd ed., London, 1923.
- J. M. A Tract on Monetary Reform, London, 1923; A Treatise on Money, London, 1930.
- Conference, Brussels, 1920; "The Foreign Exchanges" A. C. Pigou, Memorandum on credit, currency and exchange fluctuations, Paper XIII in International in the Quarterly Journal of Economics, Vol. 37, 1922. Financial

購買力平價說序說

五九 (七一五)

は、最初の强い反對を蒙つた後、 利流の國際價値理論は研究者の大多數によつて全く等閑に附された、と言つてゐる。(註四)併しながらカッセル說 び物價運動の理論が多くの信奉者を得たし、又ゴッシュンの外國爲替機構の分析がよく研究されたけれども、英吉 ことが出來なかつたのである。エンヂェルは、十九世紀後半以降の獨逸及び墺太利に就いて、 から、他國に類例のないインフレーションを經驗した國でありながら、 逸に於いては、粗朴な形式に於ける貨幣數量說が多くの批判を加へられ、又名目的貨幣本質論が發展したのである 英吉利に次いで購買力平價說が其の信奉者を獲得したのは、恐らく獨逸(廣く獨逸語系を指す)である。併し獨 却つて廣範な地步を築くに至つてゐる。 購買力平價說は最初は多くの容認を收むる 古典派の正貨移動及

(祖国) James W. Angell, Theory of International Prices, p. 344.

ては、ヴェーバア Adolf Weber とシュパン イケン Walter Eucken テルハッレ Fritz Terhalle も略々同様の見解を陳べてゐる。近年に於ける著名の學者とし ク Rudolf Dahlberg シュムペータア Joseph Schumpeterブローダ Ernst Broda ミーゼス Ludwig von Mises オ カッセル以前から、一國貨幣の購買力と爲替相場の間に或る關係の存することを主張した。(註五)シュレジンガア ランスブルク A. Lansburgh は、 國際貸借說を藉りようとしてゐるが、併し大なる持續的變動に對して問題となり得るものは購買力平價說 は貿易制限と資本移動を第二義的要因と認めたけれども、大體ランスブルクと同様の說を、ダールベル 貨幣本質論上では名目説を採るにも拘らず、又貨幣數量説を認める結果、旣に Othmar Spann wbao 前者は、日々の比較的僅少の爲替 變 動の說

Gruntzel も之に同情的立場を採り、 ばならぬけれども、猶ほ且つ此の説を國際貸借説から分つ根本概念は正當で重要である。殊に此の說の支持者が、 てゐる。(註七) 又ウィーン學派のハーバアラア Gottfried von Haberler は、購買力平價の適用には制限を附さね 六)又後者は、購買力平價說が機械的な國際貸借說よりも、幾多の點に於いて一進步をなしたものであると、認め あるのみで、購買力平價の變化は、結局に於いて、それに相應した爲替相場の變動を生ぜざるを得ないと述べて誰 と結論してゐる。《註八》 その他ハーン L. Albert Hahn ナイサア Hans Neisser ケルシャークル Richard Kerschagl 貨幣數量の適當な調整によって、 Siegfried Budge はカッセル説に賛意を表し、ヴァーゲマン 爲替相場を要望さるゝ水準に安定出來ると主張するのは、全く正しいことである。 プリオン W. Prin は國際收支よりも物價に重點を置いてゐる。 Ernst Wagemann グルンツェル Joseph

(註五) A. Lausburgh, "Die grossen Notenbanken im Dienste der kriegführenden Staaten", Die Bank, 1915, S. 1090.

(紐代) Adolf Weber, Allgemeine Volkswirtschaftslehre, München and Leipzig, 1932.

溢勻) Othmar Spann, Die Haupttheorien der Volkswirtschaftslehre, Leipzig, 1929.

(紐尺) Gottfried von Haberler, Theorie des internationalen Handel, Wien, 1983.

れを汲むベンディクセン Friedrich Bendixen エルシュタア Karl Elster ノイマルク Fritz Neumark 情的立場に立つ論者の一人ではあるけれども、 是れに反して、購買力平價說に對して否定的見解を持する者も尠くはない。リーフマン Robert Liefmann は同 カッセル説を以て極端に過ぎるものと考へてゐるし、 クナップの流 は勿論、ブッ

買力平價は一般的現象でないと觀て居り、又ミュラア Hugo Müller は此の說の因果的理論としての缺陷を指摘し、 併し爲替相場の認識根據としての意義を承認してゐる。 第二義的要因となして、兩說の調和折衷を圖り、 > Siegfried Buff を固執してゐる。 カウラ Rudolf Kaulia 理論的金屬說を採るデイール ハイン メラア Hero Moeller は平價説の意義を認めないではないが、購 Otto Heyn Karl Diehl は國際貸借を以て第一義的要因、物價を以て ヘルフェ リッヒ Karl Helfferich は孰れも國際貸借

Laurence Laughlin ダルス Lleanor Lasing Dulles ゖンチェル James W. Angell タウシッグ J. W. Taussig (スタンフ*ード大學)は、カッセル說をは唯一可能の科學的爲替理論と稱して註九) 要因たり得ることは認めるけれども、 **半分に低落するであらうと、** 彼がまた此の説に左袒せざるを得ないことは明白である。外國爲替を専攻とするホイッテーカー Albert C. Whitaker 至つてゐない。併し吾々は、フィッシャト 同じく英語系でありながら、 は、正常の為替相場が相對的購買力を表現するものと觀、 Viner 等は孰れも購買力平價說に反對を表明してゐる。 述べてゐる。(註一〇) グラハム Frank D. Graham は、 アメリカに於いては、購買力平價說は英吉利及び獨逸に於けるほど代表者を獲るに それは多數要因の一つに過ぎぬと爲してゐる。(註一一) 然るにラフリン Irving Fisher に於いて最大の貨幣數量說論者を見出すのであるから、 物質が一國に於いて倍加すれば、爲替相場は ブラッドフォード Friedrich A. 相對的物價水準が爲替變動の

(超九) Albert C. Whitaker, Foreign Exchange, New York and London, 1938.

(語 1 〇) Frederick A. Bradford, Money, New York, 1928

Frank D. Graham, Exchange, Prices and Production in Hyper-Inflation, Princeton, 1930

をば一般的攪亂の出發點として取扱ひ、而して國內物價變動は寧ろ之を原因としてよりも結果として認めてゐる。 味の貨幣數量説が殆んど一般の承認を得て居らぬからであつて、多く彼等の分析の仕方は、國際收支及び外國爲替 故に佛蘭西人は、 れ詳細に吟味した者は、その數も決して多くないが、大多數此の説に反對してゐる。蓋し佛蘭西では、 購買力平價說が最も强い反對を受けてゐるのは、佛蘭西に於いてゞある。此の國に於いてカッセル說を多かれ尠 購買力平價の爲替相場への應用に就いて、多くを知らうとせぬのだとも言はれるのである。 嚴格な意

替とが一致の傾向に在ることは之を容認するけれども、貨幣は爲替變動の唯一の原因でないことを立論し、 價値論に立脚する爲替心理說を主張してゐる。(註一三)ジョルジアデー 價が爲替相場の影響に曝されると言ふ方が正しいであらう、と爲してゐる。(註一二)その他の論者は殆んど總てカ William Oualid であらう。 撮り、 佛蘭西に於いて、爲替相場と國內物價との間に於ける或る平 行 關 係 を 認むる殆 ん ど 唯一の論者はウーアリド 説の批判者又は反對者であつて、その中著名な學者はノガロー リスト Charles Rist はつ である。ノガローは、國際收支と爲替相場との間の相關的依存性を主張し、又アワタリオンは、 併し彼は、購買力平價說が事實と一致せぬ前提に立つてゐることを指摘し、寧ろ、國內物 為替低落が物價騰貴の結果であり得ることを認めるが、 Bertrand Nogaro 及びアフタリオン Albert Théodore Georgiades もアフタリオン説 資本移動のより重要な 物價と爲 主觀的

ることを主張し、ポース Alfred Pose トンシオ Maurice Ansiaux ド は為替から物價への影響方向を論定してゐる。その他、アルノオネ Aug バティス Armand Debatisse は孰れも平價說に贅意を表せず、國際貸借說

(祖 [[]) William Oualid, Leçons sur la monnaie et les problèmes monétaires, Paris, 1927.

(註一三) Bertrand Nogaro, Monnaie, prix et change, 2. ed., Paris, 1937. 皮芯 Monnaie et industrie, Paris, 1929. La monnaie, Paris, 1924. 皮色 Modern Monetary Problems, London, 1927; Albert Aftalion

狀態との間に一定の關係のあることは承認する、けれどもそれは、購買力平價說の主張するが如く無制限ではな は、各國の總ての價格は相互依存の關係に立つ全價格體系の一部分をなすものであり、從つて爲替相場と各國價格 た。然るに同じく瑞典派に屬しても、近年貿易理論家として著名になりつゝあるオーリン 前者がより强力であると認め、ドルプは、イレフレーション期に於ける爲替低落をば專ら貨幣對價値の低下に歸し Wicksell とドルプ Elisabeth van Dorp の賛成説がある。ウィッゼルは購買力平價と國際收支の兩要因を擧げるが、 其の他の諸國に於ける若干の學者を觀るに、カッセルと同じく瑞典派に屬する人としては、 購買力平價說と國際貸借說とが根本的に背馳しないことを斷定してゐる。(註一四) Bertil Ohlin ウィックゼル に在つて Knut

(註 | 四) Knut Wicksel, national Trade, Cambridge (Mass.) 1933. der intervalutarischen Kurse", Weltwirschaftliches Archiv, 15. Band (1919, 1920); Bertil Ohlin, Interregional and Inter-Vorlesungen über Nationalökonomie, Jena, 1928; Elisabeth van Dorp, "Die Bestimmungsgründe

而も後者の重要なることを主張して、調和的な態度を示して居り、又伊太利のフォア Bruno Foà 及びロスボッシ は、爲替相場を形成せしむる需要供給は長期的には關係二國の物價に依存し、短期的には兩國の貿易勘定に依存し、 り入れ、濠洲のコープランド D. B. Copland も同情的所説を述べてゐるが、南阿のレーフェルト R. A. Lehfeldt Ettore Rosboch は共に物價•為替間の因果關係に對して批判的見解を採つてゐる。 和蘭の學者ブル インス G. W. J. Bruins 及びグリュックシュタット Hans Glückstadt は共にカッセ

さることが立證されてゐる。蓋し・ 然購買力平價說を受け容れるのであるが、貨幣數量說を緩和する者は此の說を修正するか、或は之を否定するに傾 相場は貨幣價値の一面であるからである。換言すれば、嚴格な意味の貨幣數量說又は之に近き說を採る論者は、 を知ると同時に、論者の此の說に對する態度は、貨幣に關する根本觀念に依存することが判るのである。藍し爲替 ふ、徹底を缺く論者もないではない。 以上、購買力平價說に對する諸家の見解を概觀したが、之に依つても、此の說の信奉者が尠なからず存すること 一方、金屬的本質論の主張者は國際貸借說に依據することが多いのであるが、併し必ずしもさうではな 或る意味に於ける貨幣數量說を容認しながら、 而して名目的貨幣本質論の主張者は國際貸借說に赴くべきものと屢々されてゐるが、その必ずしも然ら 各目的見解と貨幣數量說との間には、相互に結合し得べき密接な關聯があるか 而も貨幣の對外價値に關しては全く之を應用しないと

以上の概觀に於いては、 購買力平價說批判者の所說を殆んど舉げなかつたが、 此の點は、 後に此の説に對する岩

購買力平價說序說

六五 (七二一)

干の批判を試みるに當つて言及されるであらう。

ロバートソン及びグレゴリイ説

ことを指摘したが、 **嚮きに、ロバートソン及びグレゴリイが、英吉利の學者の中に在つて、** 茲に彼等の所說を窺つて置かう。 率直明解に購買力平價說を組述してゐる

が四志ではなくて僅か三志に價する時があるとすると、人々は七五志を支出して二五ユトープを買ひ、 ば、為替相場は一ユトープ=四志、又は一磅

=五ユトープに定まる傾向があるであらう。然るに若し、 態が比較的安定してゐるとと、兩國間に唯數理的傾向のみが存すること、 前提としてゐる。 供給が存するからである旨を明かにし、續いて何が磅とユトープ(ユートピア國貨幣)との間の為替相場を決定す るかを論ずる。 ユートピア債権を得たいとする者がある。ユートピア側に於いても同様の希望がある。 合とに分けて述べてゐる。先づ彼は、英吉利及びユートピアと云ふが如き、相互に商業交通の行はれる二國間に於 て、為替相場が形成されるのは何故であるかを問題にし、それは、例へば英吉利人にしてユートピア貨幣に對す 先づロバートソンを觀るに(註一)、 之を處分して英吉利貨幣に換へたいと希望する者があると同時に、叉英吉利貨幣を有して斯かる對 但し此の場合、 そこで「例へば小麥一クォーターが英吉利にて五磅、 問題を單純にするために、兩國が人爲獨立の本位制度を有すること、兩國の貨幣狀 彼は為替相場をは、人為的本位(arbitrary standards) の場合と金本位 э. 1 輸出税も輸入税も存しないこと、此等を トピアにて二五ユトープであるとすれ 即ち外國貨幣に對する需要 ーユトープ の場

替の矯制運動を何等招來しないことがあらう。 の限界は、兩國間に最も多く輸送さるべき財貨に對して課せられる諸掛りと關稅 ふ 舊水準に到達する。 を獲、この場合にも二五志の利潤を收むることになる。 小変を買入れ、之をユー 潤を收むるであらう。 ープの價格は低下して三志となるかい 即ち、 と謂ふのである。故に例へば、 前者の場合にはユト 爲替相場は何時でもその正常水準から離反し得るけれども、それには一定の限界があるのであつて、こ トピア國で一クオ 斯くして吾々の命題が樹立されるやうに思はれる。唯それには斯う云ふことが通例附加され 是れに反して一ユトープが五志になつたとする。すると、人々は英吉利に於いて五磅を以て トピア國に賣れば二五ユトープの代金を得るのであるから、之を英貨に換へれば一二五志 ープの價格を騰貴せしめ、後者の場合には之を引下げて、結局一ユトープ=四志とい 一の小麥を仕入れ、而して之を英吉利に賣れば五磅を獲、斯くして二五志の 英・ユ阿國間に於ける小麥一クォーターの輸送費が二五志であるとすれば、ユ 或は騰貴して五志となるかして、小麥の何等の移動を招來せず、從つて爲 而して兩者何れの場合にも、多數の人々が同樣の取引を行 (あるとすれば) との金額に依存

で、その逆の過程ではないと結論するであらう。 於ける小麥の價格が競つて上騰することを承知してゐるからであり、從つて、貿易品の價格を決定するものは爲替 「所が讀者にして國際取引の經驗を有してゐるとすると、右の場合に於いて何が原因であり、 何故ならば、讀者は、ユートピア國貨幣の價格が騰貴すれば、リヴァ 此の事は、 個々の取引の場合には眞理である。けれども、經驗あ 何が結果であるか ープールに

英吉利側に存した困難が緩和されるであらう。そこでユトープの價格は再び下落しなければならぬであらう。以上 至るのである。 態の如何によつて維持され得るのであつて、此の事實は或る與へられた爲替相場の維持にとつて本質的條 の如くユトープで表示された貿易品の價格水準が與へられてゐると、磅で示された一定價格水準は英吉利の貨幣狀 れる。斯くして英吉利人の手には、より多額のユ **ち英吉利に輸入せられるユートピア商品は前よりも尠くなり、同時により多量の英吉利商品がユートピアに輸出さ** 更されないとすれば、全體としての英吉利人は以前ほど多量の財貨を購ひ得ないであらう、 る貿易業者が恐らく見落してゐる所は、若し斯様な價格騰貴が大規模に起り、又英吉利に於ける貨幣供給が何等變 トープが供給されることになり、ユートピア貨幣を獲得する為に と言ふことである。即 件たるに

て英吉利側には何等の變化がないとすれば、爲替相場は一磅に付五ユトープの代りに一〇ユトープになつたとして 貨幣の供給にも關係を有してゐるのであつて、例へばユートピア國貨幣の供給が前よりも二倍となり、是れに反し 國間に取引される財貨に對して、兩國貨幣の有する相對的購買力に依存する。...:為替相場はまた、兩國に於ける も驚くに足らぬのである。」(註二) 「それ故に、 茲に問題としてゐる命題は次の如くになる、 人為的本位制度を有する二國間の爲替相場は、

たのであるが、 ロバートソンは,その『貨幣論』再版(一九二四年)に於いては、第七章『外國爲替』の中に購買力平價說を述べ 一九二八年の新版に於いては、可なり改訂を加へ、 第四章『金本位』の中に略々同様の見解を與へてゐる。

(盐中) D. H. Robertson, 1928, pp. 59-73. これは、同書が、金本位の世界的復興期に改訂されたからであると考へられるが、弦では此の新版に據ること、する。

ち換へてもよい, 貨中に加はるのであるから、 貨幣の相對的價値に依存することは、 よつて金本位になったとしても、 る。或は現實の爲譽相場は上下何れの方向へも、 依存する。換言すれば、 然らば金本位の下に於いてはどうかと云ふに、假りに英吉利及びユートピア國が金貨流通又は金塊制度の運用 と謂つてゐる。(註三)茲では結局彼は、通說と同一の說明の仕方に終つてゐる。 | 函域法律を以て各々の本位の基礎として規定された金の量目に依存する、と言ふことにな 問題を單純にして言ふと、正常為替相場は、金で表示された兩國貨幣の相對的價値に 輸送の障碍を除いてみると、兩國間の正常為替相場が、貿易品で表示された兩國 依然として眞理であらう。併し此の場合には、金が最も容易に取引される財 兩國間の金輸送費を超へて此の正常水準から離反し得ない、 と斯

(拙川) D. H. Robertson, op. cit., pp. 73 74.

總て相互に關係を有するもの 内に國境を超えて取引さる「金額の比ではなく、 原因たる物質水準が採り上げられてゐる。 續いてグレゴリーの論する所をみるに、カッセルの名を舉げて其の所說を祖述してゐるのであるが、併しロバ ソンが關係二國間に取引される貿易品の價格を主として問題としてゐるに對して、彼に於いては、貿易を惹起する とすれば、 同一貨物は其の何れの國に於いても同一價格を有する筈である。何となれ 即ち彼自らの言葉に依れば、「爲替相場を決定する主要原因は、一定期間 此等の貿易運動の原因たる物價水準である。今假りに多數の図が

購買力平價說序說

六九 (七二五)

る財貨量と一定の割合に立つであらう。換言すれば、一國の貨幣が諸外國の貨幣の何れに對して有する相對的價值 向があると言つても同じ事である。其處で、或る一國貨幣の他國の貨幣を以て表はされた價値は、之を以て購ひ得 共通の物價水準が樹立されんとするであらう。或は、貨幣價値は相ひ異る何れの地に於いても同一ならんとする傾 る地に於いては、一貨幣單位の換へらるゝ財貨量は從來より減少するから、貨幣價値は下落するであらう。 するであらう。蓋し一貨幣單位が從前に比べて一層多量の財貨と交換さるこからである。然るに其の財貨の流出す 貨が安價な地から高價な地に移動するは明かな事である。而して其の財貨の流入する地に於いては、貨幣價值は騰貴 水準の比率と同一となるであらう、と云ふことは容易に観取される。 件の二貨幣間の相對的購買力によつて定まるであらう。即ち此等通貨の間の爲替相場は其れ等の國に於ける物 岩し一財貨の價格が何れかの一國に於いて他國に於けるよりも高價なること運送費以上に及ぶならば、斯る 斯くして

セルは購買力平價と稱して居るが、其の特色とする所は、それが移動的の平價であつて、二國に於ける物價水準の總 **購買力を有するから、この事を明かにするには、為替相場は各國の發行する貨幣數量の比によつて決定されると言つ** た方が、多少不精確な點はあるが便宜であらう。 買力の比によつて決定されると論斷されてゐるが、併し現在のヨーロッパの通貨は其の發行國内に於てのみ直接の る變化に從つて動搖すると云ふ點に存するのである。「《註四》 而もグレゴリイは「購買力平價說の一般的に眞理で 「斯る理論を綜合概括したのが即ちカッセルの說である。此の說では、相ひ異る通貨間の爲替相場は此等通貨の 鬼に角、二國の物價水準の比率によつて與へらるゝ爲替相場をカッ

ろ詳細な條件と精練とである」(註五)とさへ極論してゐるのである。 最早殆んど疑ふの余地がない。 今日經濟學者達の努めて居る所は、 此 の説の缺點の探究ではなくて寧

ļη Gregory, Foreign Exchange before, during & after the War, 1925, pp. 80-84

出闲) T. E. Gregory, op. cit., Preface to the 3rd Impression.

て貿易差額は久しい間一國に有利であつたり、又不利であつたりすることは出來ない」といふ意見を引用し「この てしてはならぬ。 **ゐるのである。** 差額以外の、一層永久的な原因に歸すべきである。だから氏としては、以前の意見が如何なるものであつたにもせ 至二十パアセントにまで達してゐる。それ故にソオントン氏は、氏自らの原理に從つて、その原因を不利なる貿易 氏の執筆した一八〇二年以前にも存した現象である。而もそれ以後累進的に増加して、 點に就いて私は全然氏と同意見である。然るに現在の爲替は、決して一時的の現象ではない。それは、ソオントン 價格」に於いて、 然らば一體購買力平價說の論者は國際貸借說を如何に批判して居るであらうか? 今日に於いては、 私は信じて疑はない」(註六)と斯う述べてゐるが、グレゴリ 即ち之を要約すると、「抑々吾人が現實の國際貸借差額を考察するに當つては、國際貸借の總額を以 ソオントンの「一國の商業上の輸出入は、自然にそれ自身で、或る程度に於いて平均する。 寧ろ一定期間内に支拂はる可き總ゆる種類の貸借の總額でなければならぬことは明かである。 爲替の下落は流通媒介物の減價によつてのみ說明せらるべきであるといふ意見に、同意する イも亦同様の批判を一層仔細に力説して 既にリカアドォ 今やその下落は正に十五乃 は「地金

是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就 第一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就是一个人,我们就

る者があるが、これは明らかに不合理である。 のである。前者の中日々の差額に就いては、それが所謂『國際貸借』と結び付けられ得るかの如くに取扱はんとす 者に就いては、其の項目が他の項目に依つて相殺され得るものであり、又現に相殺されてゐることを看過してゐる て困難ではない。即ち其の理由は簡單で、斯様な意味の差額は稀にしか存在しないと云ふ丈である。 々の差額と一定期間内の差額、一定期間内の支拂差額總額と一項目に就いてのそれとを混同して居るのである。後 定期間内に支排ふ可き債務額が受取る可き債權額より尠いことを意味する。而して國際貸借說は、 れは一定期間内に國際收支關係を伴ふ可き國際貸借である。從つて『貸借差額が逆であると云ふこと』は一國が 斯る貸借差額の大小によつて決定さるものと論斷して居る。併し、貸借差額の逆調なる言葉を斯様に解釋すれ -またさうせざるを得ないが-- その為替相場變動に及ぼす影響の如何に尠少であるかを證明するは、 爲替相場の變動 唯世人は、日

斯る相場低落の起らぬ場合に然るべきよりも遙かに迅速にAからBに富源が輸送され、 動には、相場の騰落が差額に及ぼす反動作用によつて、 技術上から觀ての事であるが、理論上から言つても全く同様である。併し一定期間の差額に歸因する爲替相場の變 逆調ならしむるものではない。何となれば、協定して適當の時期まで其の支排を延ばし得るからである。 へばAB二國間の相場が漸次Aに逆調を示すとする。其の結果は、一般的に言へば他の事情にして等しき限り、 **俳し一定期間の差額はあり得るものである。けれども此の未決濟額が略々解つて居れば、それとても爲替相場を** 貸借額に増減が惹き起されるから、限度が存するのである。 以て差額の決済が實行され 尤もこれは

體が之を減少せしむべき諸々の力を發生せしむるのである。併し、此の場合國際貸借說論者の根本的誤謬は貸借差額 式を採ることもあらうが、兎に角財貨も勞務も固定財産もAからBの所有に移るであらう。 はそれ丈相殺されて了ふであらう。それ故に、多かれ少なかれ支拂差額が存するならば、其の存在することそれ自 逆調を以て爲替相場低落の主要原因と認むる點に在るのであつて、それは全く本末を轉倒せるものである。」(註上 金融六 .7 斯る富源の移轉はAからBへの輸入促進の形式を採ることもあらうし、 Riacrdo, "High Price of Bullion"小畑茂夫譯『リカアドオ貨幣銀行論集』七一―七二頁 叉BからAへの輸入阻害の 斯くしてAの支排差額

落を説明せんとして産まれたものであるが、今日とれが祖述者は廣く一般爲替相場の場合に之を適用するに至つて は其の制約條件に相違はあるとしても一 ゐる。蓋し、 以上は購買力平價說の國際貸借說に對する一駁論の概要である。元々購買力平價說は紙幣本位國の爲替相場の低 爲潜相場が貨幣の對內價値に依存するとなす以上、本位制度の種類に依つて一 - 或は之を適用し或は之を排除することは、理論の一貫を缺くことゝなる -假令異る種類の下で

E. Gregory, op. cit., pp. 34-44.

(附記) 本稿は猶ほ、若干の獨逸系購買力平價說を擧げ、反對論者の所言を參照しながら此の說の前提を吟味し、且つ此 説の基礎理論たる貨幣數量說との關聯に於いて檢討を加へる計畫であつたが、時日と紙幅の餘裕を缺くに至つたから、 れ等の點は別の機會に論述することゝする。 そ

聯買力平價說序說